

山口 雄志
YAMAGUCHI YUUSHI



徳田 智子
TOKUDA TOMOKO



これまでのダイアログとしての小品展

「起源イブ」では、各作家が小品を持ち寄り、グループ展示したものを目の前にして、表現に向

かうモチベーションや表現のテーマ・技術をぶつけ合
お互いの作品を批評しあうディスカッションを行ってきた。

さらにコラボレーションを行い、制作過程における作家の生の
言葉や作品の立ち上がる瞬間に、身体・体感・技術を交錯させて参

本留 真二
MIZUTSUNE SHINJI



吉田 浩
YOSHIDA HIROSHI



加し、作家同士のコミュニケーションを深め、個々の言語レベルのイ
マジの呪縛からの解放・そこで現れてくる新しい感覚や理論の具現化を目指

した。そして今回最終夜、その意識を作家自身が展覧会を企画することまで含め、

展覧会期間中に行われる作家同士、作家と観客の交流自体を作品化すること

まで拡大し、「ミーティングルーム」を共同制作する。その場では、近代的

画廊・美術館のホワイトキューブの仰々しさ、作品陳列の予定調和を改変す

る建築空間を立ち上げる。二階から展示全体や参加者同士のディスカッショ

ンを俯瞰できる覗き窓、ミーティング内容を他の場所に転送するモニター、

壁の中のメール機密室などに加え、作家一人一人の現在を描写した壁画とし

て、対話し続ける「顔」をテーマとしたビデオ作品が設置される。これは、

この5月に旧日本橋小学校にて開催された、日本・オランダ現代美術交流展

に参加したオランダのアーティスト、ロブ・モーネンの作品に触発されたも

のである。彼は、現地を自己の足で歩きまわり、日本の社会の暗された構造

に、慣習・言語・性など様々な批評的視点から光を当て、野性的なデジタル

空間に結実させた。その彼のビデオ作品を、参加者が批評し、その批評言語

を起点に、コラボレーションを目論む。更に、アーティストの原始的な本能

に働きかける矛盾に満ちたうごめく有機的空間の中で作品を探す旅をさ

せ、それらを身体と対峙させたパフォーマンスが対話を加速する。

「起源イブ」が追い求めてきた、批評言語によるコミュニケ

ーションも、他者の息吹を求め、自己の体内感覚を解放さ

せる「ミーティングルーム」を制作する、立体的なコミ

ュニケーションの過程で初めて可能となるはずで

ある。

「起源イブ」が追い求めてきた、批評言語によるコミュニケ

ーションも、他者の息吹を求め、自己の体内感覚を解放さ



小林 智子
KOBAYASHI TOMOKO



上野 洋子
UENO YOKO



ロブ・モーネン
BOB MOENEN



橋本 正太郎
HASHIMOTO SYOUTAN



村上 圭一
MURAKAMI KEIICHI

起源イブ第六夜

仮設ミーティングルーム

暗黙の表情-デジタル化された顔達

GALLERY SURGE

2001年6月11日 (MON) ~ 6月23日 (SAT) 日曜休廊

11:00AM~7:00PM

オープニングパーティー 11日 (MON) 6時PMより

公開ディスカッション 14日 (THU) 20日 (WED) 7時PMより

ディスカッションはどなたでも参加できます。

TEMPORARY MEETING ROOM

批評文

ロブ・モーネンの作品について

彼の眼差しは、社会構造の観察に向けられている。

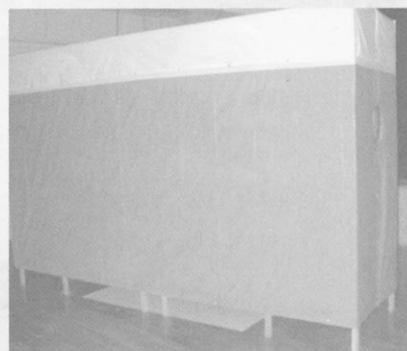
今度も来日早々から彼は、ビデオカメラ片手にあちらこちらへと足早の取材を続けた。彼の目は、カメラのレンズの光に似てシャープであり、時々フラッシュさえするような緊張感があり、印象的であった。

今回、彼のフラッシュは橋の下に並ぶビニールハウスに向けられた。社会からドロップアウトし、ホームを失った者たちが、それでも生きるために建てた仮設ハウスである。交通の架け橋の下に副次的に発生した危うい風景を、彼はキャッチした。

彼は、会場である教室の中央にビニールハウスの再構築を試みた。オランダ人の感覚をメスに、切り取ってきた各部を注意深く繋ぎ合わせ、さらに多くの取材で拾い集めたノーマルな日本社会のイメージ映像の断片を移植した。ビニールハウスには、二つの顔サイズの覗き窓がある。こちらの窓から覗き込むと、雑誌から切り抜かれたビジネスマンの顔が、ビデオモニターで早送りされ、さらにそれがハーフミラーへと分裂して、放電する眩しさに襲われる。向こうの窓には、若い女性の顔が連続フラッシュされる。生々しい放電光がある。ドロップアウトした者の闇を眩しく照らし襲うのは、経済人の顔と若い女性のフラッシュバックである。さて、ビニールハウスの床とは、即ち寝床であろう。その床に、木の格子を写したような静止映像がある。よく見ていると、ぼけた何かが転がるような一瞬がある。賽銭箱である。さらに長く見ていると、ローマ字によるフレーズが浮かび上がる。読んでいくと「鬼に金棒」等の庶民的なことわざであることに気付く。それは、誰にとっても気持ちの休まる枕元のスタンドの光であろう。

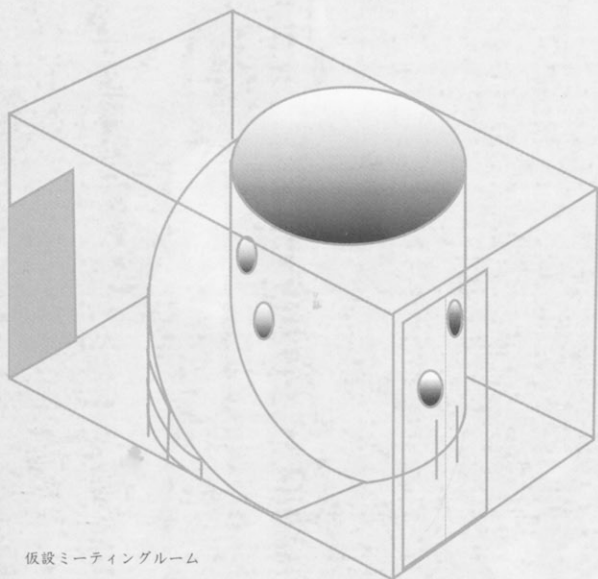
ロブは、描写することの意味と力を熟知しているアーティストである。カメラマンとしてのロブは、現代の日本社会の腫瘍としてのビニールハウスを見逃さなかった。そして科学の光を知る彼は、一見ノーマルな社会が、照射する光の性質によって、つねに暴かれるものである事を示す。ノーマルな生活者・経済人の顔が猛スピードでフラッシュバックされると、現代の平均的な一つの人格として統合され、現代について喋っているような映像になる。大袈裟に動く若い女性像の口元も異常に生々しい。しかし、それがビニールハウスの中にある時、放電光の色合いを放出する。それは、言うまでもなくアブノーマルであり、逆にビニールハウスの空間は、静謐なものとして映る。ビニールハウスが、プリミティブな空間へと変質する。何か壁に貼られた切り抜きは、洞窟壁画と似た雰囲気を出す。

ビニールハウスには、現代文化が失った生きる空間の生々しさが凝縮している。ロブは、それらを照らし出す光のテクノロジーの開発者である。現代社会の歪みを最新テクノロジーの肉声によって告発するのが、彼の表現方法である。最も孤独なビニールハウスは瞑想空間であり、現代社会を投影するには最適の場かもしれない。光には魔力がある。檻の中で魔物化している映像は、私の内側に潜むものを引きずり出す迫力がある。



Rob Moonen...Shiju Goen/1000 face

水留 周二



仮設ミーティングルーム

通常ホームレスとは家を持たない人のことを指す。

ロブ・モーネンは彼の鋭い感性により東京という大都会からホームレス・ホームという矛盾を孕んだ小スペースを発掘し、展覧会場である小学校の教室という「場」に持ち込んだ。

暗闇の室内に不気味な光と音を漏らしているそのボックスは、近寄りたいたい奇怪さと覗いてみたいという欲望の2つの感情を奮い起こさせる。ボックス両サイドに造られた小窓より室内を覗くと、怪しくひかるその光の正体が、1秒間に3コマ程度の高速で入れ替わる複数の顔であることに気付く。無数の表情を持った「顔」は高速で入れ替わり、まるで1人の人間の人格を写し出しているかのように見える。片面は若い女性で、対局の面が中高年の男性でいずれも1分間隔で付いたり消えたりし、その光が照らしている1分間のみ室内の様子がうかがえる。室内の壁面には無数の雑誌が貼ってあり、その内容から顔の正体は、若い女性が風俗嬢で中高年の男性が政治家だということが解る。雑然として狭い室内は排他的感覚と哀愁が漂っていて、居心地の良さ逃げ出したいという感覚が交差する。更に室内中央の床面にはビデオプロジェクターで格子状の形体が映し出されている。目を凝らしてみるとお祈りをしている影と、たまに飛んでくるお金で、この格子の正体が賽銭箱であることに気が付く。同時にこの奇妙な金属音がお金の飛び交う音であることが発見できる。祈りとお金のコントラストは滑稽に見え、賽銭箱はこの部屋の住人の前に置かれた、「お恵み」の缶のようにも見える。その賽銭箱には時より日本のことわざがローマ字で映し出され、書かれている内容と情景との対比は皮肉っぽいユーモアで社会を描写している。

ロブ・モーネンの作品はホームレス・ホームという矛盾空間をプライベートな「場」より、パブリックである小学校に移植し、その狭い室内に「政治家と風俗嬢」「祈りとお金」「微笑みと商売」「難しい顔と企み」「孤独と喧騒」「心地良さと不安」などの対蹠関係をぶつけることで人間の内在的姿を見事に描写している。この作品を小窓より覗いているはずの自分が逆に覗かれている感覚におそわれ、取ずかしささえ覚えてしまう。彼の作品の前では、観る側と観られる側の関係でさえ問われることになる。

山口 隆志

起源イブ第六夜

仮設ミーティングルーム

暗黙の表情=デジタル化された顔達

GALLERY SURGE

101-0032 東京都千代田区岩本町 2-7-13 渡辺ビル1F
TEL 03-3861-2581 FAX 03-3861-2582
2-7-13-1 F, Iwamoto-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0032

URL=<http://www.catnet.ne.jp/surge/>
e-mail=surge@catnet.ne.jp

「起源イブ」事務局



JR神田駅東口徒歩7分。地下鉄日比谷線小伝馬町4・2、都営新宿線岩本町駅ASより徒歩5分。